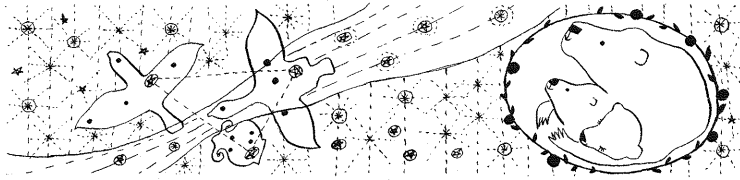


巻頭言

「協同的に学ぶ」「とらふん」と

岩田純一

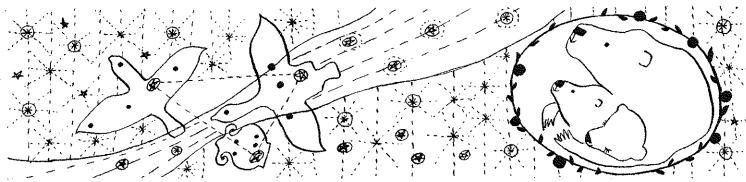
近年、幼小の発達や学びの連続性から「協同的な学び」の必要性が唱えられています。もちろん、この学びは小学校での学習とは異なるものです。幼児の生活は遊びが中心であり、遊びを通してさまざまなことを結果として学ぶのであって、学ぶために遊ぶわけではありません。子どもたちが遊びや生活の中で共通の目的を生み出し、その実現や解決に力を合わせて工夫しながら協同的に活動を進めていくといった共同性の育ちは、就学が間近な年長児にとって大切になります。それは小学校での生活や学習活動を支えていく基盤となるからです。しかし、この協同的な学びは、決して幼児期の後半になってから一挙に出現してくるわけではなく、それまでの教育課程（過程）の積み重ねの延長上に可能となってくるのです。



*

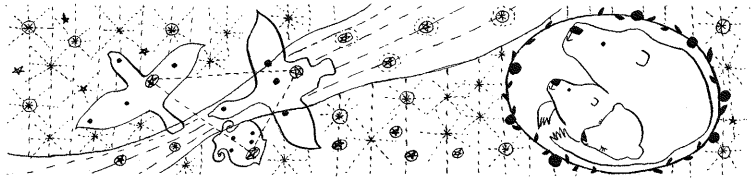
初めて幼稚園に入園する年少児にとっては、まず園の中で一人ひとりが安定した生活をつくっていくことから始まります。最初は保育者と子どもの一対一の関係づくりが中心であり、仲間に関心はあっても子ども同士と一緒に遊ぶことはなかなか難しいようです。だからこそ「○○ちゃんこんなの作ったよ」「みんな○○をして遊ぼう」などと子どもたちをつなぐ保育者の働きかけが必要になります。しかし年少児も後半になると、まだ保育者の仲介が必要だとしても、仲間とも一緒に遊べるようになり、お弁当を「一緒に食べような」と仲間を誘う・仲間と約束するといったことも見られます。

しかし、本格的に仲間との生活や関係づくりに腐心するのは年中児を迎えてからです。この期には、仲間の遊びに入れるか否かが子どもにとっては関心事になってきます。従って、遊びの仲間に入れるかどうかや、仲間の取り合いが原因となったいざこざなどがこの期の特徴になります。「○○くんはおれの仲間や」「友達やら」といった関係表現も盛んに聞かれます。仲間との関係が活発になるだけ、そこに葛藤や摩擦が生じてくることも多くなります。しかしながら、まだ自分たちではその関係をうまく調整していくことが難しく、「先生に言ってやる」と保育者に言いつけにくるといったパターンが典型的に見られます。そこで保育者は、双方の言



い分を聞き、それを双方に伝えながら仲裁に入ることになります。この保育者の仲立ちによって、子どもは相手の言い分や気持ちを知り、何がなぜ悪かったのかなどを知るといった、他者への理解や共感性、道徳的な心をはぐくんでいく格好の機会にもなるのです。そして、自分の言い分を一方的に話すだけではなく、相手の要求や言い分にも耳を傾ける必要性があることを学ぶことになります。

年長児にもなると、相手の気持ちを察し合いながら、仲間が共同してかわるこ
とが格段にうまくなってきました。それに伴い、子どもは「わたくし」を「わかれわれ」
の一員としてとらえるようになってきます。この「わかれわれ」という意識は、へ皆
のために頑張る・応援する「へ皆の遊び」といった仲間への意識をもった共同的な
行動として現れてきます。もはやほとんど保育者の介入を必要とせず、子どもは皆
でイメージを共有しながら遊びをつくり・展開し、いざこざも当事者同士が話し合
うとか、仲間の仲裁によって解決していけるようになってきます。年長児には仲
間で競い合う遊びが多く、そこではしばしば遊びの公平さをめぐるいざこざも見ら
れますが、子どもたちで工夫しながら公平なルールをつくって遊べるようにもなり
ます。従って、この時期、保育者の手な介入が子どももの自律性が育つ機会を奪っ
てしまう危険性があり、保育者には、ときに待つ・黙って見守るといったスタンス
が求められるようになります。



*

「協同的な学び」とは、保育者が一方的に課題を与えてグループで一緒に活動をさせて事が足りるといったものではありません。共同性の育ちこそが、子ども同士が協力・協同（アイデアを出し合う、教え合う）しながら目的の実現のためにつながっていくことを可能にします。それには、まず一人ひとりの生活の充実があり、次に仲間との共感する関係性をつくっていくといった積み重ねが必要なのです。中でも年中児に仲間との生活や関係づくりがしつかりなされていないと、年長児になってもバラバラで仲間と共同で行動することが難しい、何となくクラス全体に落ち着きがない、いつまでも保育者が声を荒げて指示しなければならないといったことにもなってしまう。

仲間との協同性の育ちは、他方で「わたし」という個の世界の深まりとつながったものです。それは、「まねせん」とか「人は人、じぶんはじぶん」といった表現となっても見られます。仲間との生活の中で、一方では仲間との共同的な関係性を希求し、他方では個としての自分らしさへの希求も強くなってくるのです。保育者の大切な仕事は、一人ひとりの個の生活を仲間との共同性へとつなげ、仲間との共同・協同的な活動や関係がさらに主体的な個の充実へと還っていくような実践をつくり出していくことではないでしょうか。

（京都教育大学）